

光カートリッジ 現代技術で再び

相模原の企業、LED使い開発

デジタル化が進む反動か、アナログの音色を楽しむレコードが人気だ。そのレコードの針の動きを光の変化として捉え、出力するのが「光電式カートリッジ」。デジタルの波にあらがえず姿を消していたのを、相模原市南区の「デジタルストリーム」(青柳哲次社長)がLEDなど現代の技術でよみがえらせた。国内外のマニアから高い評価を受け、世界16カ国で販売されている。

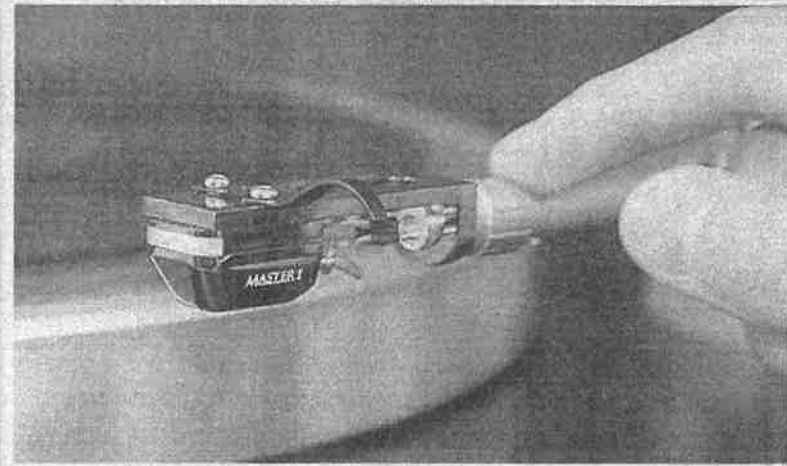
国内外から高評価

同社の試験室。美空ひばりの「悲しい酒」のレコードに、光カートリッジの針先が静かにおちる。これはアナログなのか、デジタルなのか。音には驚くほど透明感があって、な

おアナログ独特のぬくもりで聞く者を包み込む。従来のカートリッジはレコードの針の動きを磁石とコイルでとらえていた。磁界の影響で音の再現力に限りがあるとされる。一

方、光でとらえる光カートリッジは磁界の影響を受けない、高品質でナチュラルな音を再現できるとい

う。デジタルストリームの音響レベル「DSオーディオ」は2013年10月、光カートリッジの1号機(イコライザーとのセットで35万円)を発売。14年に海外



①「光カートリッジの復活は、私たちだけの力ではなく、先人の苦労の上に成り立っています」と話すDSオーディオの青柳哲次代表
②針の動きを光でとらえる光カートリッジ=いずれも相模原市南区

向けの2号機(同80万円)、16年に3号機(同220万円)と立て続けに製品をグリードアップし、販売した。昨年12月までの販売台数は国内外で約800台。DSオーディオ代表の青柳哲次さん(30)は「高級品なので、どれほど売れるか想像もつかなかった。このオーダーは想像以上」と驚く。

光カートリッジは40年ほど前に複数の大手音響メーカーから発売されたが、市場はアナログからCDへと大きく変わっていき、「5つ星のように現れ、消えた」と哲次代表。同社は1988年に哲次代表の父、哲次社長と10人が立ち上げた。高い光学技術でマイクロソフト社と光学式マウスを共同開発し、DVDなどのディスクが正確に作られているかチェックする機器は世界トップシェアを誇る。ただ、協業や下請け仕事も多く、哲次代表は「うちにしか出来ない、きらりと光るものがないか」と自社開発の商品を探っていた。道筋が見えたのは、同社顧問に「レコードを聴きにおいで」と誘われた時だった。マイケル・ジャクソン

のスリラー。「ものすごい響きに驚き、感動した」。12年1月、それが光カートリッジとの初めての出会いだ。思えば、父が大手音響メーカーから独立して作った会社だ。運命的なものを感じた。かつての製品は白熱灯の熱の影響で針先を支える「カンチレバー」のゴムの劣化が課題だった。「LEDを使うことで、問題が解決するのではないか」。早速、試作に取りかかった。現在の従業員はわずか約20人。小さな会社なので、多くの人材を投入するわけにいかない。日常の業務に支障がないよう、技術顧問の浜口和男さん(72)と2人で取り組んだ。光を鮮明にとらえるため、針とLEDの間隔、角度を変え、0.1mm以下の単位で試行錯誤を繰り返したという。15年には、ドイツの音響機器専門誌で、歴代の最高点を獲得。国内の音響専門誌でもグランプリ受賞など数々の高い評価を受けている。12月から始まった相模原市のふるさと納税の地域活性化応援コースでは、光カートリッジDS001(35万円)が返礼品に選ばれた。市産業政策課の担当者は「相模原の高い工業技術力を全国に発信していくために、代表格として選んだ」と話す。

(白石陽一)